
囚

ケニーD

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

囚

【Nコード】

N2870X

【作者名】

ケニーD

【あらすじ】

我が娘を奴隷とすること、自身の幸福のために他者を殺めることの正義、そして人々の幸福の在処とは。 囚が第一部（2006年以前）、未掲載が第二部（2007年以前）、囚が第三部となります。

陽の昇りと小鳥の羽ばたき、そして草木の揺らぎが目の奥に浮かび、次第に色づいてゆく。どれも淡く、本物にはほど遠かった。その色彩は目覚めへの合図のようなもので、きつかけとなるのは小鳥のさえずりを聴かせる小さな目覚まし時計だ。頭で自然を感じて身体を起こし、いつも煙草を一本吸ってから店を開ける準備をした。外に出ると、朝の天気に応じていつも小菅の気分は左右され、今日はとても気持ちのよい、問いかけるような風と白む空が、頭にこびりついていた眠気をほじくるようにして奪いさつてくれた。こうやって自然が生き物の眠気をかき集めて、十分にたまったのなら、ようやく夜になるんじゃないかね、と小菅はなんとなしに考えた。

店のシャッターをあげ、夜中のうちに業者に搬入されている菓子や雑貨、飲料と伝票とを確認していると、家内が台所で昼の弁当を作る音が聞こえた。チキンカツや煮物といった簡単なものではないけれど、手作り弁当ということで客の評判はよかった。商売のうえで目玉商品はやっぱり必要で、一応はこれが目玉といえるのだと思う。

店の整理を済ませ、レジカウンター裏側から居間に首だけをのぞかせてみると、眠たそうにする娘がパジャマ姿で口をもごもごさせながら歯をみがいていた。

「歯みがき粉が垂れて畳が汚れるじゃないか」というと、娘は言葉にならない返事をし、洗面所へと戻っていった。

「もうすぐ時間だから早くしなさい」

娘は高校二年生で、当然学業があるものの、小遣い稼ぎにアルバイトがしたいというものだから、登校前の早朝の一時間と夕方の三時間を小菅のもとで働かせていた。他でアルバイトをさせるよりよっぽど安心できる。しかしその分、時給は少しばかり高くしていたのだけだ。娘の容姿的かわいさというのはいつの間にか、

同じ風景を見続けているかのようにして麻痺し、わからなくなっていて、小さかった娘を両手で抱きかかえた頃のような幸せに満ちた感情もなかった。しかし、娘が、ふと若かりしときの家内を思い出させるような、遠くを憂いとともに眺めるような表情を見せたときには、小菅は家内をそつと見つめたり、昔を思い浮かべたりもした。そしてそんな娘には、どうやら色々な虫がつくようで、男子生徒にとつては少しばかり人気があるのだろうとも思えた。目の届く場所で働かせていても、ファンらしき客は今までに数人いたのだ。父親が店にいようと、堂々と近づいてくる者もいたのだから、遠くで働かせるのはほんとうに、夜道を歩かせるより恐ろしいことだ、と小菅は考えていた。

娘は、男の子に興味なんてない、油絵を描くので精一杯だ、といっているものの、いつ心がわりするかもしれず、小菅は最近では自分でも気づかぬうちに客をにらみつけていることもあった。そんなときは、なんて嫌な人間なのだろう、と自己嫌悪もしたのだけれど、結局は同じことのくり返しでしかなかった。しかし、看板娘、という点でいえば、娘はその任をよく果たしているようにも考えられた。娘がレジカウンターに立つ朝の一時間のあいだ、小菅は店内をのぞける居間に戻り、軽く朝食をとりながら新聞を煙草の煙で黄色く染まるかと思えるほど読み続ける。結局、新聞を読んだところで、小菅の生活になんらかの変化があったかという、なにもなかった。身内が殺されたとか、罪を犯したとか、そういう話もとくになく、今ではもう、選挙にも興味がなくなっていて、世の中の動きを知るといふことは大切なのだろうけれど、しかし、それを知ったところで意見を交わす相手も今はこれとっておらず、小菅はただの小さな商人だった。なのになぜ読むのか、それは、「世の中のこと、なにも知らないのね」と娘に馬鹿にされないようにする、ただそれだけのためだ。いつか娘に勉強を教えてくれといわれたときのために、高校時代以来あけていなかった教科書を、こつそりと何度か読みふけたこともある。そのおかげで威厳は失われることもなかった。

今まで、いや、今も小菅は家族と平穩に過ごすこと以外になにも興味がない。オリンピックやマラソンやなにかしらの勝負を見て、人がなぜあれほど熱狂的になれるのか不思議でならなかった。そして、虚構のドラマを見てなぜ涙を流すのか、虚構だからこそ安心して涙を流せるのかもしれないのだけれど、それでも小菅にはそのことも理解ができなかったのだ。

ふと、小菅は考えた。私はいつ喜び、いつ涙を流しただろうか、と。そのことがさしあたって重要ではないということと、そして今、最も重要なのは、娘に蠅が近づいていることだ、ということ、娘になれなれしく話しかける男の声で判断した。その声の主は毎朝決まってこの時間帯にくる、娘と同じ高校に通う男で、小菅は名前を知りたいと思つたこともない。毎度、パンと紙パックの牛乳なんてものを購入しているらしく、まったく健康的に思えた。小菅はそつとぞく。

「今日こそ一緒に登校したいんだけど」

ほんの少し髪を茶色に染めて、目をいっぱい輝かせている少年の口調はたどたどしいようでもあった。

「駄目よ。いつも来てくれて嬉しいけど、駄目なものは駄目。あたし、忙しいんだから」

「そんなつれないこといわないでさ、頼むよ」

「もうっ。こんなところで牛乳なんて買わずにさ、大人ぶってカクテルでも飲むほうがいいんじゃない」

「……それって、軟派ってこと？」

小菅は笑わずにはいられなかった。もちろん、声には出さずひっそりと。初めて詳しく話の内容まで聞いてしまったのだけれど、娘は以外としつかり者のようで、牛乳を飲み続けるような軟弱で不健全な男にはたぶらかされることもないような気がした。「今日こそ」という言葉から推察するに、なんだか娘にアタックしているのかもしれない、その点でいえば、彼は軟弱にあらず、なかなか熱い男なのかもしれない。

「あたしはね、だれとも付き合う気はないの。だから学校で好きとかいうのもやめてくれないかしら。遊んだりするのは嫌いじゃないから友達ならいいっていつてるでしょ？ 誤解されるから二人きりってというのが嫌なだけよ」

「じゃあ、こんど遊ぼうじゃないか。友達を誘うよ」

「今は忙しいからそういう話はまた学校でね。いつまでもここにいたらあたしの父さんが怒るかもしれないわよ。とつても怖いんだから」

「見たことあるよ、ちつとも怖くなんてないね」

「あら、いうのね。でも案外そのとおりかもね」

小菅はそばに置いてあつた娘用の手鏡を唸るように見た。少しばかり目つきを強張らせてみたものの、とくに恐ろしさもなく、なんとなく、そんなことをしてしまつた自分に照れた。お客を怖がらせるような顔じゃなくてよかつたよ、自分をそうやって納得させ、少年が帰ると、「今日はやけに話したようだな」と、居間から足を伸ばし、サンダルを履きながら娘にいった。

「席替えして席が離れたからかしら」

「授業中にも喋っているのか？」

「そんなわけないでしょ。彼なりに、遠くにいった感覚でもあつたんじゃないかしら」

「若い者の心はよくわからんね」

「あら、まるでいきなり歳をとつて生まれたかのようないいかたじやない」

「そうかもしれないな。さあ、もう学校の準備の時間だぞ」

そういつて店番を交代し、のんびりと客の相手をするのだった。

しばらくもすると着替えを済ませた娘がブレザーの制服姿で私のもとへやってき、「どう？ おかしいところはない？」とふわりと舞つて見せる。「いつもと同じさ。べつにおかしくもなんともない」というと、「もうっ」と少しだけふくれて今度は家内のもとへ行き、同じようにたずねる。これは毎日のこと、感覚の麻痺している小

菅には、やはり答えようもなく、それに、「綺麗だよ」などと恥ずかしいことを嘘でもいえるわけもなかった。「嘘でも嬉しい」などと女は喜んでみせることがあるけれど、そんな心はまったくいい加減で、もしかすると、「嘘でも嬉しい」という胡散臭い言葉自体が嘘そのもので、手玉にとられているのは逆に男のほうではないのだろうか、とも思える。したたかな女は、嘘の喜びをみせ、男になにかとねだっているのかもしれない。女の笑顔は強力な武器だ。小菅はそう思い、過去をなんとかしに振り返ってみた。幸い、家内はしたたかではなく、それは喜ぶべきなのはわからなかったけれど、こうやって今も丹精こめて弁当を作っていることに関しては、素直に喜ぶことができた。

店の客層は、にぎやかすぎずしかし寂れすぎてもいない住宅街という立地のせいもあってか、ほとんどが常連で、大抵は見た顔ばかり。なんの新鮮さもなく、いつものように感覚は麻痺していた。たまに、車を店のまん前に停めて、あわてて店内に駆け込み、トイレを貸してくれと頼む客もいて、そういうときは金魚をすくったときのように少しのあいだ楽しい気分になる。用を済ませた後は、金魚が「ポイ」を破り仲間のいるプールに戻るかのごとく、車に駆け戻りさよならをされることがほとんどなのだけれど……。ああ、なんと愛想のない人間の多いことか。そう考えた小菅自身も、愛想は決していいとはいえず、そのマイナス面は家内が近所付きあいをすることで補ってくれている。二人はそれぞれの役目をいつの間にか自覚し、バランスよくこなしていて、だから今の生活も成り立っているのだろうと思うことができた。

しばらくすると、家内が作り終えた弁当を店内に持ちこみ、陳列した。そのときに居あわせた老人客の一人が、家内の後ろから、並べられる弁当をもの欲しそうな表情で見つめていた。並べ終わると、今度はそれぞれの弁当を一つ一つ手にとり、物色するように見入った。小菅は、この老人がこれからこの弁当のどれかを食べるのだろうということが可笑しくてたまらなかった。自ら選んだなにかを食べるこの老人は生きる、ということが無性に可笑しかったのだ。当然、生きるために食べるこういうのは当たり前のこと、しかし、ほとんどの老人はそこに執着を思わせる。いや、老人でなくともいい、温かな家族の食事の団らんだってそうなのだ。人々が幸せに満ちて好みの食事をするどの姿も滑稽なのだ。小菅は思った。私も笑われるべきなのだ、と。そして、人の目を盗んでなにかを食べるということはとても利口で、マナーを学んでフランス料理を食べることよりもよっぽど気高いのだ、とも思った。幸福を笑っているので

はなく、無警戒をいつているのだ。必死さは時として嘲笑を生むことがあるものの、やはり、無用心のほうこそ笑われるべきだ。とくに、生きるうえでは。

老人はぶつくさいいながら手にとった弁当とペットボトルのお茶をゆつくりとレジカウンターまで持ってきた。焼いた鯖の弁当だった。小菅は「温めますか？」と聞かず、代金を伝えた。すると、「温めてはくれんのか、最近はだれもが冷たいのう」と老人は小さく呟いた。小菅は聞こえない振りをし、会計を済ませた。できたての温かい弁当をなぜ温める必要があるのか、小菅は老人の皺だらけになっている砂漠から生まれたような手をじつと見ていた。冷めていない弁当だったということもあり、小菅の真意はきつと伝わらなかったに違いなく、少し、弁当も老人もいまいましく思えた。

一段落終えた家内はせわしなく、弁当を作り終えたあとは続いて家事にとりかかる。洗濯や掃除、買い物とあくせく働き、昼過ぎの休憩までまともに会話すらする暇もなくて、だれよりよっぽど働いているように思えることもあった。しかし小菅は、それが家内たるものの有りようだ、と考えていて、手伝うことはせず、客のない暇を見つけては居間との境で煙草をふかし、外の通りをのんびりと眺めた。もちろん、怠けているように見えても、店内のことはほとんど小菅がやっついていて、店を閉め、最後に寝るのも、だれより早く起きるのも小菅なのだ。

店のある場所は住宅街にもかかわらず、昼を回った直後から弁当を買いに客がどつと押し寄せてくる。常連以外ではスーツ姿や白衣姿（なぜか彼らはいつも堂々としている）の者も多く、一瞬にして店の奥が人で見えなくなるほどごった返すものの、それでも小菅は一人でレジスターを打った。そして、その時間を刺激のあるものとして一応は楽しんでいた。その時間帯こそがあとになって働いたと実感できるもので、その時間以外はただの、老後を暮らす父の顔と同じような表情になっているに違いないと感じていた。昼以外の退屈しているとき、ふらつと外に出ると、雲が夜空をこするような

動きも十分に確認できたし、影の微妙な傾きだつて把握することができた。近所の猫が鳴いた回数も数えることができるのだ。近隣の住人が通れば、軽く、会釈だけはし、よく晴れた日には皆一様に、表情がとても穏やかだった。

近所には早口で界限に有名な畑中という五十を超えた婦人がいて、いつも白を基調としたシンプルで、そして清潔感のある格好をしていて、一見すると、教養もありそうなものだけれど、話す畑中さん自身の口の動きが追いつかないほどぺらぺらと言葉を放つものだから、一瞬にして清らかそうだったイメージが破壊されたのを、小菅がここに新店舗を構えるために引越してきた当初の衝撃として覚えている。畑中さんも近所の住人ということで、今では一応はこの常連で、小物や食料品以外には女性週刊誌を何冊か、定期的に購読してくれている。きつと、一流の声優だつて苦労しそうなあのとてつもない動きをする口から、近所の婦人連中と芸能人の話やくだらない噂といったあたりとあらゆる低俗な話題を飛び出させ、ちよつとした人気と、精神的主導権を握っているのだろう。しかし、そんな畑中さんは、近所の一部の住人から、壊れて早送りにしかないビデオデッキのようだと、と陰口を叩かれているらしい。店の界限には住宅がマンションを含めて六十棟ほどあり、車通りの少ない車道をはさんで数えれば、もつとあるのだけれど、とりあえず、よく見る連中はたぶんこの六十棟の住人で、そして、その界限ではだれが作ったのか、いつのまにやら大きい派閥が二つできていた（簡単な集まりというのは気づけばできているようなものなのだろうけれど）。一つはあの早口の畑中さんが率いるもので、もう一つはいつもエプロンを着て頭も白髪混じりという、まったくお洒落に興味のなさそうな、女性としての魅力の消えうせた、草しか生えていないような田舎から出てきた古田というこれまた五十代の婦人が擁するものだ。小菅はあまりそういった女同士のどろどろとした話に興味がなく、以前、家内がどちらの派閥に属するか畑中さんに詰め寄られたことがあったのだけれど、そのときは小菅が表に出て、

無益で醜い争いに家内を巻き込まないでくれ」と一喝した。すると、婦人は顔を紅潮させ、「なんっ人、二度っ店っ行くもっでか。こっ町で商売できなっしてやっわ」といつも以上の早口でまくしたてたのだけれど、商売を妨害するような感じの意味だということとはなんとなく理解でき、「人のささやかな幸せのある生活を奪おうというのでしたら、あなた自身もそれなりの覚悟が必要ですよ」といつてやった。すると、次の日からほぼ毎日、あわせてけっこうな金額になる商品を媚びるような笑みを浮かべて購入してくれるようになったのだ。

一方、古田さんのほうはといえば、真面目という文字が一面に書かれた服を着て、同じように真面目の旗を掲げてもなんら違和感がないと思えるくらいの生真面目ぶりで、二人の息子は一流大学に在学中、娘は弁護士になっっている。婦人は町内会の役員もしているようで、肩書的には古田さんのほうが畑中さんよりうえだ。小菅が知っていることはその程度のことと、それ以上あまり深いことは家内に聞かないようにしている。婦人たちは婦人たちの社会でそれぞれ苦勞のあるいがみ合いをしているのだろう。それをわざわざ知って、こちらまで精神的な苦勞はしたくない、と思っただからだ。

面白いのは、畑中さんと古田さんが店内で鉢合わせたときで、そうやって人をあまり笑いたくはないのだけれど、それでも、彼女らが店内のガラスや鏡越しに、お互いの姿を意識して避けあっているあからさまな姿は、ひねくれた子供のようでもあり、警戒する猫のようでもあり、馬鹿らしくて苦笑せずにはいられない。しかし結局、小菅にとっては二人ともいいお客であっった。

昼の客に畑中さんがまじっっていた。とくに会釈以外の挨拶という挨拶は店内ではせず、ただ購入される品物からなにかと想像を巡らせるだけだ。今日は、どうやら弁当やお茶などを買っつて、珍しく昼食を作る手を抜いたようだった。会計を済ませると、いそいそと肩を他の客にぶっつけるような勢いで出ていっった。あの婦人は口だけでなく、行動もせわしなかつた。まったく落ち着きがないのだから、

いったい家庭でどのような暮らしをしているのか、洗濯機の回転や、扇風機の羽の回転さえ不満に思っているようで、なかなか楽しいであろう生活をしているような気がした。

昏もすぎると、陳列されてあった商品が所々抜けているのがつく。簡単に補充し、それから家内が弁当の残り物で彩った卓袱台につき、遅めの昼食をほとんどは二人でとっている。砂浜のすべての砂をぎゅうぎゅうに詰めた砂時計を見続けるような一日の中で、ようやく家内とまともに話をする事ができ、小菅は多少、この時間を待ち遠しくも思っていた。

「裏のおじいさん、もうそろそろ危ないんですって」

家内が玉子焼きの切れ端をつまみながらいった。ほんとうに何気ない、小菅の嫌う陰口ではない、近所の話題が昼の主な内容だった。

「そろそろ？　じゃあ最近亡くなったのはだれだったかな？　てつきり裏のじいさんかと思っていたよ」

「先週亡くなったのは、吉山さんのおじいさんですよ」

「ああそうか。裏のじいさんが亡くなると、きつと静かになってしまうなあ。多少、界限にも子供が増えて、しっかりと叱ってくれる頼もしい人だと感謝もしていたのに」

「叱ってくれたのは吉山さんでしょ」

「ああそうだったか？」

家内は少し呆れた表情を見せた。

食事も終盤になると、並べられていたおかずはほとんど平らげられて、最後には消しゴムのような玉子焼きだけが一切れ残っていた。小菅は家内よりも多く口にしていたので、ごちそうさまというとしていたのだけれど、ふと、店内の様子を気にしてまた目をちやぶ台にやると、玉子焼きは半分に分けられていて、瞬間に、少しの憤りと、いじらしさと、涙の予感とで複雑な気分になった。小菅は、それほど食べるのに苦勞するような生活の日々ではない、家族にひもじい思いをさせているはずはない、と思っていて、それは間

違いではなかった。目の前の玉子焼きが、無造作に分断され、波に流され離れていくだけになってしまった島のように見え、少し、やるせなかった。せめて、向かい合う二人に対して垂直にはなく、水平に分けられていたのなら……、きっとこの思いはなかったに違いない。

「なぜ、今日に限って、お前はこんなことをするんだ」

できる限り感情を押し殺してたずねた。

「こんなこと？ 玉子のことをいつてるのかしら？ いららないのならいただくわよ」

家内はぺろりと二切れとも口に放り込んだ。あつ、と思わず言葉が飛び出た。なんとということだろう、家内の行為は、理由なき厚意だったのか。くだらないことを深く考えて、みすみす最後の玉子焼きを逃してしまった。いや、分けられる前は家内にもあげるつもりではあったのだけれど。たかが玉子焼きと人はいうかもしれない。

しかしどの家庭でも、好物の取り合いと、その隙をはかる攻防が内心でも繰り広げられているはずではないのか。貴族であろうと、おいしいものは人より多く食べたい、本音はそうであるはずだ。きつとそうなのだから、「たかが玉子焼きで」と笑ってはいけないのだ。玉子焼きが日曜日の平和な昼を思わせるのなら、さくらんぼの甘い果実でもかまわない。一つだけ残されているのを見れば、きつと、少しくらいは卑しい思いが生まれるはずだ。小菅は、まんまと家内の気まぐれにしてやられたという気分になり、かといって、恨んだりはずせず、この経験を次に活かせばいいじゃないかと考えた。

昼食の時間には幸い客はなく、小菅は店に戻るとふくれた腹を軽くさすりながらまどろみに似たものを、カップに注がれたコーヒーのその香りだけを楽しむような感じで味わった。瞼の中を、赤い虫が円を描いたり波打たせたりして踊っている。小菅はたまに、不思議な感覚を味わうことがあった。それは、睡眠中、ふと目を覚まし、確実に目が開いているにもかかわらず自分の寝ている部屋と違う見たこともない場所が視界に映っているというもので、そして

なんどか瞼をまたたかせると、それぞれの瞬間に、自分の部屋と、知らない部屋とが交互に映るのだった。やがて力をいれて瞼を閉じると、知らない空間が圧縮されるように脳内に入りこみ、瞬間には小菅のすぐそばに、だれかがいるような気配を感じるのだ。しかし、不思議と、その一瞬に目を覚ますことはできず、朝になって、不思議な体験をした、と思い出す。もちろん、夢だろうと思っっている。そう思っていたほうが混乱しなくて済むし、なにより、夢でないとして、家内や娘に話したところできっと、夢でもなければ狂ったのよ、といわれるに違いないのだから。

空に浮かぶ充血した碧眼が、辺りの雲まで紅く染めた。じきに、娘が帰ってくる。通りの先にある、自転車でのぼるにはかなりの苦勞を強いられるあの坂から。

小菅は、娘がその坂の頂上に徐々に姿を表す瞬間が好きだった。紅く揺れる太陽を背に、黒く長い髪をふわりと風になびかせ、少女は歩く。アスファルトに細い影が伸び、その影が少しだけ小菅のほうに早くつく。ほぼ毎日店の前に出て、お帰りという瞬間が好きだった。ただいまといわれるその瞬間だけには恋をしていた。それは、坂と太陽の生み出した幻想的な世界だからで、とくに枯れ葉の舞い散る秋は芸術作品を思わせるほど素晴らしかった。まあ、そのとき以外で、娘がどうというわけでもなく、そして、それが健全だし、そうでなければいけないとも思った。考えると、坂に登場するのは娘でなくともいいのかもしれないのだけれど、今まで見た中では、やはり娘が最高の画だった。なぜなら、あの坂をのぼるのはこの時間、ほとんどが買い物帰りの婦人連中で、息急ききらしながら買い物袋をぶら下げた自転車を押しての登場は、どこにも美がなく、さすがに目を覆いたくなるものがあつた。

店の前で小さく一服していると、やがて娘がゆっくりと登場し、小菅は客が来ないことを祈つた。今日も一人で帰宅したようだったけれど、女の子の友人と二人で帰ってきたときは、いつもと違った輝きがあつた。それも小菅が好きな瞬間だったのだけれど、じつと二人に見とれていたりとすると、なんとなく、近所の住人に訝しがるような気もして、すぐに店内に戻ることにしていた。いつの間にか近くにいた娘がカバンを小さく小菅の腰にあてた。

「なにぼうつとしてるの？ ただいまっ」

「あ、ああおかえり」

「また、カメラで撮りたいとか考えてたんでしょ？」

「ん？ いや、もう思っでないよ。毎日写真を眺めて、素敵な瞬間を見飽きたくはないからね。それに、インスタントカメラじゃため息の連続になるだけだろうしな」

「親バカもほどほどにね」

娘はそういつて部屋に駆けていった。親バカとは少し違うのだけれどね、と思しながら手に持っていた空き缶に煙草をつぶし、娘が交代にくるまで雑務をこなした。

娘は髪を結び、前掛けをして少し気合をいれ、それから店内のそれぞれの商品を指差し確認で注視しながら歩いて回った。夕方の働き始めはこうやっていつも張り切っていて頼もしく思えるものの、アルバイトも終了間際になると、お客が途切れるたびに時計ばかり見て、ほんとうに退屈そうにもしていた。

小菅はというと、居間と店内を頻繁に往復した。というのは、夕方の場合、娘のファンらしき客が次から次へとよくくるからで、そのたびに居間から飛び出し店内で監視をしたのだった。娘は呆れて「ただのお客さんじゃない……」ということもあった。朝のクラスメイトのような会話こそあまり聞かなかつたけれど、店内で見ると、男たちの視線が娘にばかりいつているのがすぐわかる。なんとわかりやすく単純なのだろう、と嘆きたくなることもあって、だれにも悟られない想いのほうがよっぽど楽しいということを一人的男として教えてやりたくなることもあった。だれにも悟られない想いの楽しさというのはもちろん、死ぬまで思慕し続けて結局、相手に悟られないなんてことになれば意味がないのだけれど、そつと見守るような、いつもふと見かけるような、それでいて相手が気づいていないというのがよくて、だからこそ、なにげに目が合ったときに喜べる。相手が思われていると感づいたなら、喜んでくれればいいのだけれど、調子に乗る場合や、逆に避けられる危険もあって、その場合、やはり、悟られるのが早すぎたということだと思つ。だからじっくりと攻めたほうがいいのだ。と、若々しく恋愛談義を一人催してみたことに対し、小菅は意外な気分になった。そして、

彼らの恋の消失を祈るために、娘に対しては絶対に、早々に悟られたほうがいいのだ、と思いなおした。男として男の味方になるより、一人の父として娘の看守になることをいつも以上に強く決意した。と、まるで小菅が、「娘を嫁にやらん」と頑なにいい続ける偏屈親父のようにも思えるかもしれないのだけれど、当然、いつかは娘を嫁にやらなければいけないのだということは理解していて、今はたんに、若さゆえの過ちを犯さないかという心配をしているだけなのだ。きつと、どの父親だってそうに違いないはずなのだ。そこには責任という言葉が背中につなげた風船のようにちらちらと付きまとっているのだから。

以前、万引きした中学生の少年がいて、どうもわざと見つかるようにくすねたふうだった。あとになってなんとなく気づいたのだけれど、彼もどうやら娘を気にいつてしまったようで、気にしてもらいたくて、だからあえて見つかるようにしたらしかったのだ。いじらしいというか浅はかというか、とにかく、そのときは見逃してやったものの、商品ではなく娘を狙う餓鬼だということがわかった今は、たとえ幼い少年が娘の眼中になくとも、小菅は監視した。しかし、「まったく呆れちゃう」などと娘にいわれ、考えてみるとなるほど少し大人気ないような気がして、とりあえずその少年に対してだけは監視の目をゆるめたのだった。

「ねえ、このお菓子、買うね」

とチヨコレートクッキーの箱を手にとって見せた。

「仕事中に店内の商品を物色するのはやめなさいっていつてるだろっ」

「だって、お腹が空きやすい年頃なんだもん」

小菅は嘆息をし、半ば呆れながら会計する。

「あまり甘い物ばかり食べると小次郎みたいにぶくぶく太るぞ。それに、もうそろそろ夕食だろっ」

「いいのいいの、心配無用よ。それと、もう仕事終わっていいで

しょ？」

返事も待たず、そのまま気まぐれに仕事を切り上げ、部屋に戻っていった。

ところで、小次郎というのは近所で飼われている雑種の犬のことで、性格は人懐っこいものの、水を詰めたような贅肉が中型の身体を大型にまでふくれあがらせ、その肉は歩くたびにちやぷんと波打ち、最近では暑い天候もあってか散歩も嫌がりだしたようで、ずいぶんとぐうたらにもなったそうだ。飼い主がリードを強引に引っ張る姿をよく見かける。まるで、石で作られた狒犬を必死に（しかし実際、飼い主は無表情だった）引っ張っているようにもとれて、滑稽だった。それに小次郎はよくよだれを下品に垂らした。犬はそういうものだ、と考えても違和感はないのだけれど、道路できらめく小次郎のよだれは赤や緑の気色の悪い虫を大量に引きつけた。昆虫は花の香りに引き寄せられると聞いたことはあったものの、よだれに集うなんて、それに、集まるのが蝶やミツバチならまだいいのだけれど、いざくるのは人の嫌う蛾や蠅といった類で、小次郎を呪術師のように恐ろしくも思ったりしたものだ。しかし、結果、害虫はそのよだれで溺れ死ぬのだから、逆に駆除の恩恵にあずかっているということに感謝すべきなのかもしれない。まあ、死骸だらけでテカテカしている道路を歩くのは気分のいいものじゃないのだけれど。

居間からテレビの音が漏れ、笑い声が届いた。そうやって楽しそうな音を聞くと小菅は、「この店をたたんで、煙草屋でもするか」と考えることがある。それは、少し離れた場所にあるタバコ屋の老婆がいつもテレビを見ながら接客しているからで、もちろん、煙草だけで家族を養っていけると考えてはおらず、すべてはほんの少しの寂しさのせいだった。

「なあ、次の休みくらい家にいたらどうだ、たまには家族で落ち着いて食事でもとらないか？」

小菅はつい、娘に声が届くように問いかけた。

「だめよ、絵の勉強があるから」

本格的に勉強がしたいといって娘は高校の美術部を辞め、ここで働き、絵をどこかへ習いにいつている。この、「どこか」ということを知らないというのは、親として恥ずかしいことなのかもしれないのだけれど、娘はなぜかたくなに口を閉ざすのだから、どうすることもできない。しかし、確実に絵を学んではいるようで、不安はあるものの、今までなにごともないのだから親としてはもう信じるしかなかった。今、小菅にできることといえば、必死に勉強している娘を美術大学へ金銭的な心配をさせずに行かせてやることくらいだろうか。そのためにも働いているわけで、だから無理にビールの美味しい夜の食事を家族とすることもしないのだ。日々に小さな幸せはあるのだし、寂しさを感じるなどと女々しい気持ちは棄てようではないか、小菅はそう考えた。

空に浮かぶ充血した碧眼が、辺りの雲まで紅く染めた。じきに、娘が帰ってくる。通りの先にある、自転車でのぼるにはかなりの苦勞を強いられるあの坂から。

小菅は、娘がその坂の頂上に徐々に姿を表す瞬間が好きだった。紅く揺れる太陽を背に、黒く長い髪をふわりと風になびかせ、少女は歩く。アスファルトに細い影が伸び、その影が少しだけ小菅のほうに早くつく。ほぼ毎日店の前に出て、お帰りという瞬間が好きだった。ただいまといわれるその瞬間だけには恋をしていた。それは、坂と太陽の生み出した幻想的な世界だからで、とくに枯れ葉の舞い散る秋は芸術作品を思わせるほど素晴らしかった。まあ、そのとき以外で、娘がどうというわけでもなく、そして、それが健全だし、そうでなければいけないとも思った。考えると、坂に登場するのは娘でなくともいいのかもしれないのだけれど、今まで見た中では、やはり娘が最高の画だった。なぜなら、あの坂をのぼるのはこの時間、ほとんどが買い物帰りの婦人連中で、息急ききらしながら買い物袋をぶら下げた自転車を押しての登場は、どこにも美がなく、さすがに目を覆いたくなるものがあった。

店の前で小さく一服していると、やがて娘がゆっくりと登場し、小菅は客が来ないことを祈った。今日も一人で帰宅したようだったけれど、女の子の友人と二人で帰ってきたときは、いつもと違った輝きがあった。それも小菅が好きな瞬間だったのだけれど、じつと二人に見とれていたりとすると、なんとなく、近所の住人に訝しがるような気もして、すぐに店内に戻ることにしていた。いつの間にか近くにいた娘がカバンを小さく小菅の腰にあてた。

「なにぼうつとしてるの？ ただいまっ」

「あ、ああおかえり」

「また、カメラで撮りたいとか考えてたんでしょ？」

「ん？ いや、もう思っでないよ。毎日写真を眺めて、素敵な瞬間を見飽きたくはないからね。それに、インスタントカメラじゃため息の連続になるだけだろうしな」

「親バカもほどほどにね」

娘はそういつて部屋に駆けていった。親バカとは少し違うのだけれどね、と思しながら手に持っていた空き缶に煙草をつぶし、娘が交代にくるまで雑務をこなした。

娘は髪を結び、前掛けをして少し気合をいれ、それから店内のそれぞれの商品を指差し確認で注視しながら歩いて回った。夕方の働き始めはこうやっていつも張り切っていて頼もしく思えるものの、アルバイトも終了間際になると、お客が途切れるたびに時計ばかり見て、ほんとうに退屈そうにもしていた。

小菅はというと、居間と店内を頻繁に往復した。というのは、夕方の場合、娘のファンらしき客が次から次へとよくくるからで、そのたびに居間から飛び出し店内で監視をしたのだった。娘は呆れて「ただのお客さんじゃない……」ということもあった。朝のクラスメイトのような会話こそあまり聞かなかつたけれど、店内で見ると、男たちの視線が娘にばかりいつているのがすぐわかる。なんとわかりやすく単純なのだろう、と嘆きたくなることもあって、だれにも悟られない想いのほうがよっぽど楽しいということを一人の男として教えてやりたくなることもあった。だれにも悟られない想いの楽しさというのはもちろん、死ぬまで思慕し続けて結局、相手に悟られないなんてことになれば意味がないのだけれど、そつと見守るような、いつもふと見かけるような、それでいて相手が気づいていないというのがよくて、だからこそ、なにげに目が合ったときに喜べる。相手が思われていると感づいたなら、喜んでくれればいいのだけれど、調子に乗る場合や、逆に避けられる危険もあって、その場合、やはり、悟られるのが早すぎたということだと思つ。だからじつくりと攻めたほうがいいのだ。と、若々しく恋愛談義を一人催してみたことに対し、小菅は意外な気分になった。そして、

彼らの恋の消失を祈るために、娘に対しては絶対に、早々に悟られたほうがいいのだ、と思いなおした。男として男の味方になるより、一人の父として娘の看守になることをいつも以上に強く決意した。と、まるで小菅が、「娘を嫁にやらん」と頑なにいい続ける偏屈親父のようにも思えるかもしれないのだけれど、当然、いつかは娘を嫁にやらなければいけないのだということは理解していて、今はたんに、若さゆえの過ちを犯さないかという心配をしているだけなのだ。きつと、どの父親だってそうに違いないはずなのだ。そこには責任という言葉が背中につなげた風船のようにちらちらと付きまとっているのだから。

以前、万引きした中学生の少年がいて、どうもわざと見つかるようにくすねたふうだった。あとになってなんとなく気づいたのだけれど、彼もどうやら娘を気にいつてしまったようで、気にしてもらいたくて、だからあえて見つかるようにしたらしかったのだ。いじらしいというか浅はかというか、とにかく、そのときは見逃してやったものの、商品ではなく娘を狙う餓鬼だということがわかった今は、たとえ幼い少年が娘の眼中になくとも、小菅は監視した。しかし、「まったく呆れちゃう」などと娘にいわれ、考えてみるとなるほど少し大人気ないような気がして、とりあえずその少年に対してだけは監視の目をゆるめたのだった。

「ねえ、このお菓子、買うね」

とチヨコレートクッキーの箱を手にとって見せた。

「仕事中に店内の商品を物色するのはやめなさいっていつてるだろっ」

「だって、お腹が空きやすい年頃なんだもん」

小菅は嘆息をし、半ば呆れながら会計する。

「あまり甘い物ばかり食べると小次郎みたいにぶくぶく太るぞ。それに、もうそろそろ夕食だろっ」

「いいのいいの、心配無用よ。それと、もう仕事終わっていいで

「しよ？」

返事も待たず、そのまま気まぐれに仕事を切り上げ、部屋に戻っていった。

ところで、小次郎というのは近所で飼われている雑種の犬のことで、性格は人懐っこいものの、水を詰めたような贅肉が中型の身体を大型にまでふくれあがらせ、その肉は歩くたびにちやぷんと波打ち、最近では暑い天候もあってか散歩も嫌がりだしたようで、ずいぶんとぐうたらにもなったそう。飼い主がリードを強引に引っ張る姿をよく見かける。まるで、石で作られた狒犬を必死に（しかし実際、飼い主は無表情だった）引っ張っているようにもとれて、滑稽だった。それに小次郎はよくよだれを下品に垂らした。犬はそういうものだ、と考えても違和感はないのだけれど、道路できらめく小次郎のよだれは赤や緑の気色の悪い虫を大量に引きつけた。昆虫は花の香りに引き寄せられると聞いたことはあったものの、よだれに集うなんて、それに、集まるのが蝶やミツバチならまだいいのだけれど、いざくるのは人の嫌う蛾や蠅といった類で、小次郎を呪術師のように恐ろしくも思ったりしたものだ。しかし、結果、害虫はそのよだれで溺れ死ぬのだから、逆に駆除の恩恵にあずかっているということ。感謝すべきなのかもしれない。まあ、死骸だらけでテカテカしている道路を歩くのは気分のいいものじゃないのだけれど。

居間からテレビの音が漏れ、笑い声が届いた。そうやって楽しそうな音を聞くと小菅は、「この店をたたんで、煙草屋でもするか」と考えることがある。それは、少し離れた場所にあるタバコ屋の老婆がいつもテレビを見ながら接客しているからで、もちろん、煙草だけで家族を養っていけると考えてはおらず、すべてはほんの少しの寂しさのせいだった。

「なあ、次の休みくらい家にいたらどうだ、たまには家族で落ち着いて食事でもとらないか？」

小菅はつい、娘に声が届くように問いかけた。

「だめよ、絵の勉強があるから」

本格的に勉強がしたいといって娘は高校の美術部を辞め、ここで働き、絵をどこかへ習いにいつている。この、「どこか」ということを知らないというのは、親として恥ずかしいことなのかもしれないのだけれど、娘はなぜかかたくなに口を閉ざすのだから、どうすることもできない。しかし、確実に絵を学んではいるようで、不安はあるものの、今までなにごともないのだから親としてはもう信じるしかなかった。今、小菅にできることといえば、必死に勉強している娘を美術大学へ金銭的な心配をさせずに行かせてやることくらいだろうか。そのためにも働いているわけで、だから無理にビールの美味しい夜の食事を家族とすることもしないのだ。日々に小さな幸せはあるのだし、寂しさを感じるなどと女々しい気持ちは棄てようではないか、小菅はそう考えた。

空に浮かぶ充血した碧眼が、辺りの雲まで紅く染めた。じきに、娘が帰ってくる。通りの先にある、自転車でのぼるにはかなりの苦勞を強いられるあの坂から。

小菅は、娘がその坂の頂上に徐々に姿を表す瞬間が好きだった。紅く揺れる太陽を背に、黒く長い髪をふわりと風になびかせ、少女は歩く。アスファルトに細い影が伸び、その影が少しだけ小菅のほうに早くつく。ほぼ毎日店の前に出て、お帰りという瞬間が好きだった。ただいまといわれるその瞬間だけには恋をしていた。それは、坂と太陽の生み出した幻想的な世界だからで、とくに枯れ葉の舞い散る秋は芸術作品を思わせるほど素晴らしかった。まあ、そのとき以外で、娘がどうというわけでもなく、そして、それが健全だし、そうでなければいけないとも思った。考えると、坂に登場するのは娘でなくともいいのかもしれないのだけれど、今まで見た中では、やはり娘が最高の画だった。なぜなら、あの坂をのぼるのはこの時間、ほとんどが買い物帰りの婦人連中で、息急ききらしながら買い物袋をぶら下げた自転車を押しての登場は、どこにも美がなく、さすがに目を覆いたくなるものがあつた。

店の前で小さく一服していると、やがて娘がゆっくりと登場し、小菅は客が来ないことを祈つた。今日も一人で帰宅したようだったけれど、女の子の友人と二人で帰ってきたときは、いつもと違った輝きがあつた。それも小菅が好きな瞬間だったのだけれど、じつと二人に見とれていたりとすると、なんとなく、近所の住人に訝しがるような気もして、すぐに店内に戻ることにしていた。いつの間にか近くにいた娘がカバンを小さく小菅の腰にあてた。

「なにぼうつとしてるの？ ただいまっ」

「あ、ああおかえり」

「また、カメラで撮りたいとか考えてたんでしょ？」

「ん？ いや、もう思ってないよ。毎日写真を眺めて、素敵な瞬間を見飽きたくはないからね。それに、インスタントカメラじゃため息の連続になるだけだろうしな」

「親バカもほどほどにね」

娘はそういつて部屋に駆けていった。親バカとは少し違うのだけれどね、と思いつながら手に持っていた空き缶に煙草をつぶし、娘が交代にくるまで雑務をこなした。

娘は髪を結び、前掛けをして少し気合をいれ、それから店内のそれぞれの商品を指差し確認で注視しながら歩いて回った。夕方の働き始めはこうやっていつも張り切っていて頼もしく思えるものの、アルバイトも終了間際になると、お客が途切れるたびに時計ばかり見て、ほんとうに退屈そうにもしていた。

小菅はというと、居間と店内を頻繁に往復した。というのは、夕方の場合、娘のファンらしき客が次から次へとよくくるからで、そのたびに居間から飛び出し店内で監視をしたのだった。娘は呆れて「ただのお客さんじゃない……」ということもあった。朝のクラスメイトのような会話こそあまり聞かなかつたけれど、店内で見ると、男たちの視線が娘にばかりいつているのがすぐわかる。なんとわかりやすく単純なのだろう、と嘆きたくなることもあって、だれにも悟られない想いのほうがよっぽど楽しいということを一人的男として教えてやりたくなることもあった。だれにも悟られない想いの楽しさというのはもちろん、死ぬまで思慕し続けて結局、相手に悟られないなんてことになれば意味がないのだけれど、そつと見守るような、いつもふと見かけるような、それでいて相手が気づいていないというのがよくて、だからこそ、なにげに目が合ったときに喜べる。相手が思われていると感づいたなら、喜んでくれればいいのだけれど、調子に乗る場合や、逆に避けられる危険もあって、その場合、やはり、悟られるのが早すぎたということだと思つ。だからじっくりと攻めたほうがいいのだ。と、若々しく恋愛談義を一人催してみたことに対し、小菅は意外な気分になった。そして、

彼らの恋の消失を祈るために、娘に対しては絶対に、早々に悟られたほうがいいのだ、と思いなおした。男として男の味方になるより、一人の父として娘の看守になることをいつも以上に強く決意した。と、まるで小菅が、「娘を嫁にやらん」と頑なにいい続ける偏屈親父のようにも思えるかもしれないのだけれど、当然、いつかは娘を嫁にやらなければいけないのだということは理解していて、今はたんに、若さゆえの過ちを犯さないかという心配をしているだけなのだ。きつと、どの父親だってそうに違いないはずなのだ。そこには責任という言葉が背中につなげた風船のようにちらちらと付きまとっているのだから。

以前、万引きした中学生の少年がいて、どうもわざと見つかるようにくすねたふうだった。あとになってなんとなく気づいたのだけれど、彼もどうやら娘を気にいつてしまったようで、気にしてもらいたくて、だからあえて見つかるようにしたらしかったのだ。いじらしいというか浅はかというか、とにかく、そのときは見逃してやったものの、商品ではなく娘を狙う餓鬼だということがわかった今は、たとえ幼い少年が娘の眼中になくとも、小菅は監視した。しかし、「まったく呆れちゃう」などと娘にいわれ、考えてみるとなるほど少し大人気ないような気がして、とりあえずその少年に対してだけは監視の目をゆるめたのだった。

「ねえ、このお菓子、買うね」

とチヨコレートクッキーの箱を手にとって見せた。

「仕事中に店内の商品を物色するのはやめなさいっていつてるだろっ」

「だって、お腹が空きやすい年頃なんだもん」

小菅は嘆息をし、半ば呆れながら会計する。

「あまり甘い物ばかり食べると小次郎みたいにぶくぶく太るぞ。それに、もうそろそろ夕食だろっ」

「いいのいいの、心配無用よ。それと、もう仕事終わっていいで

「しよ？」

返事も待たず、そのまま気まぐれに仕事を切り上げ、部屋に戻っていった。

ところで、小次郎というのは近所で飼われている雑種の犬のことで、性格は人懐っこいものの、水を詰めたような贅肉が中型の身体を大型にまでふくれあがらせ、その肉は歩くたびにちやぷんと波打ち、最近では暑い天候もあってか散歩も嫌がりだしたようで、ずいぶんとぐうたらにもなったそうだ。飼い主がリードを強引に引っ張る姿をよく見かける。まるで、石で作られた狒犬を必死に（しかし実際、飼い主は無表情だった）引っ張っているようにもとれて、滑稽だった。それに小次郎はよくよだれを下品に垂らした。犬はそういうものだ、と考えても違和感はないのだけれど、道路できらめく小次郎のよだれは赤や緑の気色の悪い虫を大量に引きつけた。昆虫は花の香りに引き寄せられると聞いたことはあったものの、よだれに集うなんて、それに、集まるのが蝶やミツバチならまだいいのだけれど、いざくるのは人の嫌う蛾や蠅といった類で、小次郎を呪術師のように恐ろしくも思ったりしたものだ。しかし、結果、害虫はそのよだれで溺れ死ぬのだから、逆に駆除の恩恵にあずかっているということに感謝すべきなのかもしれない。まあ、死骸だらけでテカテカしている道路を歩くのは気分のいいものじゃないのだけれど。

居間からテレビの音が漏れ、笑い声が届いた。そうやって楽しそうな音を聞くと小菅は、「この店をたたんで、煙草屋でもするか」と考えることがある。それは、少し離れた場所にあるタバコ屋の老婆がいつもテレビを見ながら接客しているからで、もちろん、煙草だけで家族を養っていけると考えてはおらず、すべてはほんの少しの寂しさのせいだった。

「なあ、次の休みくらい家にいたらどうだ、たまには家族で落ち着いて食事でもとらないか？」

小菅はつい、娘に声が届くように問いかけた。

「だめよ、絵の勉強があるから」

本格的に勉強がしたいといって娘は高校の美術部を辞め、ここで働き、絵をどこかへ習いにいつている。この、「どこか」ということを知らないというのは、親として恥ずかしいことなのかもしれないのだけれど、娘はなぜかかたくなに口を閉ざすのだから、どうすることもできない。しかし、確実に絵を学んではいるようで、不安はあるものの、今までなにごともないのだから親としてはもう信じるしかなかった。今、小菅にできることといえば、必死に勉強している娘を美術大学へ金銭的な心配をさせずに行かせてやることくらいだろうか。そのためにも働いているわけで、だから無理にビールの美味しい夜の食事を家族とすることもしないのだ。日々に小さな幸せはあるのだし、寂しさを感じるなどと女々しい気持ちは棄てようではないか、小菅はそう考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2870x/>

囚

2011年11月28日23時58分発行